

編集後記

*『言語文化』第二七号は盛り沢山である。紙媒体が軒並み機能不全に陥り、文学と批評的探究をめざす雑誌が苦境を強いられているなかで、けっして大きなメディアではないが、言語と文化の多様性を体現する定期刊行物、つまり言語に本来の意味での「雑誌」として本誌は健闘していると自負している。

*歌人石井辰彦氏による短歌教室はすでに七年を迎え、そこから新人賞を獲得する若い歌人が着々と育っている。今号では石井氏の新境地として、アンコールワットに材を得た新作を寄稿していただいた。

*今号では二つの特集がある。ひとつは久々に音楽を中心としたドイツの美学を特集してみた。本学教員で音楽学専攻の

樋口隆一教授の解題のもとに、東京大学教授の小田部胤久氏、本学非常勤講師の山本潤氏、伊藤綾氏に寄稿をいただいた。またドイツのワイマール音楽大学教授であるデトレフ・アルテンブルク教授の二論文とボン・ベートーヴェン・アルヒーフ元所長エルンスト・ヘルトリヒ教授のベートーヴェン論を訳出することができた。訳筆を奮われた本学大学院博士後期課程特別研究生の加藤拓未氏と小林幸子氏、さらに樋口氏に感謝の言葉を申し上げたい。ドイツ美学というと十年一昔のごとく骨董弄りですましている学者もいるが、グローバル化が加速度的に進行している現在、より迅速な対応が必要である。本特集がそれにいくばくかの貢献を果たせればと思う。

*もうひとつの特集は二〇〇九年十一月十四日に、本学名誉教授である宇波彰氏の導きのもとに研究所が開催したシンポジウム『ジャック・ラカンを考える』の記録である。宇波氏についてはもはや説明は不要であろう。日本にいち早くドゥ

ルーズやボードリヤールを翻訳紹介し、今もなお現代思想の最前線を歩む、文字通りの哲人である。向井雅明氏は精神分析家で、『ラカン対ラカン』の著者。保科正章氏は精神科医で、ラカンの『精神分析の倫理』の翻訳がある。シンポジウムの現場にあつては、難解を極めるラカンの思想がこの三人の研究者によってしだいに圍繞され説明されてゆくさまがスリリングであった。

*二〇〇九年にはまたそれに先立って、十月九日に岡本章教授の制作構成のもとにギリシャ悲劇の『バツカイ』と日本の古典芸能である『茨木』を同時に上演し、出演者がその後壇上で語るという催しが行なわれた。本号に収録されたのは岡本章教授による企画の報告と、一観客としての四方田大彦の批評である。また映画監督である西川美和氏とメディア・アーティストの八谷和彦氏が興味深い講演をしてくださった。ここにその記録を収録できたのは悦びとするところである。

*最後になってしまったが、本研究所と

縁の深いリモージュ大学からジャン・ピエール・ルヴェ教授の古典語教育をめぐる論文の続編をいただいた。天沢退二郎名誉教授による『フィロメーナ』翻訳も前号からの続きである。これだけ内容豊富な大学刊行物も珍しいであろうと嘆息をつきながら、この編集後記を終えることにする。

(四方田大彦)

*雑誌『言語文化』にドイツの文化や音楽に関する特集を組ませていただいたのは、嬉しいことである。人選にあたって最近、明治学院大学で行われたドイツ関係のイベントや、ドイツからの招聘教授さらにはドイツ関係の講義を担当されている若手の教員の優れた仕事を紹介しようと思った。

*小田部胤久教授(東京大学)は美学がご専門だが、「美学から見た日独交渉史」は、二〇〇八年五月三十一日(土)に明治学院大学で行われた国際シンポジウム「世界に向けて——日独学術交流の未来」

の分科会「グローバル社会における日独文化」(座長・樋口隆一)における講演原稿である。その後、台湾やドイツでも講演され、好評を博したという。

*デトレフ・アルテンブルク教授(ワイマール音楽大学)は、ドイツ音楽学会会長も務められた重鎮だが、ドイツ学術交流会(DAAD)の支援を受けた本学とワイマール音楽大学との交流事業の一環として二〇〇八年一二月に来日され、質の高い講演をしてくださった。「音楽と文化的アイデンティティー」は、芸術学科二年生のゼミのための英語の講演であった。平明に書かれてはいるが、じつはこれは同音大で行われたドイツ音楽学会の総合テーマにほかならない。ドイツで最もアクチュアルな問題を、若い聴衆にぶつけてくださったことに感謝したい。「リストの手からヴェルディの精神」は、アルテンブルク教授の専門領域であるリスト研究の最先端の成果である。芸術学科一年生のための「西洋音楽通史」の中で、ドイツ語で講演されたものを樋

口が通訳した。非常に専門的な内容だが、これも若い聴衆に強烈な印象を残したものである。

*エルンスト・ヘルトリヒ博士は、ボン大学のベートーヴェン・ハウスの主任研究員と「新ベートーヴェン全集」の編集主幹を務められたベートーヴェン研究の第一人者だが、定年退職を機に、二〇〇八年春学期に本学招聘教授として来ていただいた。「ベートーヴェンと歓喜」は、これも芸術学科の一年生と三年生を対象とした私の講義の中でドイツ語で講演していただいたものである。日本人ならだれでも知っている「第九交響曲」をテーマとした内容は分かりやすいが、じつはこれも最先端の研究成果に基づいている。

*山本潤非常勤講師は、文学部共通科目「ドイツ文学」を担当されている本学の最も若い教員の一人である。論文『記憶』の継承——『ニーベルンゲンの歌』と口承文芸』は、東京大学に提出された博士論文に基づき下ろしで、こうしたドイツ中世文学に関する本格的な研究

を紹介できる喜びは大きい。

*明治学院共通科目の「芸術学（音楽）」を講じられている伊藤綾非常勤講師は、ドイツのカールスルーエ大学でベートー

ヴェンと韻律に関する論文で哲学博士を得た俊英である。「君よ知るや南の国」として知られるゲーテの名詩「ミニヨン」の歌」を歌詞としたドイツ・リート七曲

それぞれにおける詩と音楽の関係を究明した力作は、実に興味深いものとなった。寄稿者・訳者各位に心から感謝したい。

（樋口隆一）